78

杏雨書屋所蔵の黒川文庫「本草」について
――早川佐七の楂考書屋との関係――

吉川　澄美
東京都

【緒言】1923年の関東大震災では多くの貴重な蔵書が焼失されたが，「松廼舎文庫と並んで最も惜まれるのは黒川文庫の罹災であった」と内田魯庵は『典籍の廃墟』で書いている（『紙魚繁昌記 魯庵随筆続』所収）．黒川文庫は国学者の春村（1799–1866），家学を嗣ぎ美術工芸史家でもあった真頼（1829–1906），東京帝国大学教授の真道（1866–1925）の3代にわたる蒐書で，真頼が『古事類苑』の編纂のために使用した資料も多く含まれていた．浅草小島町にあった文庫は24種に類別して大小2棟に分蔵され，幸い小庫は震火を免れた．残された文庫の変遷については永田清一氏（「黒川文庫」『実践女子大学文学部紀要』23集，1981年）や城田秀雄氏（解題「黒川真頼家蔵書目録影印」『実践女子大学文芸資料研究所年報』8号–11号，15号1996年）などが報告され，城田氏によって全4,667点（12,380冊）の所蔵機関（明治大学・ノートルダム清心女子大学・日本大学・国学院大学・東京大学・実践女子大学・宮内庁書陵部・慶応義塾大学）の内訳が報告されている．一方，昭和7–8年頃に早川佐七氏（1885–?）が売却して5代目武田長兵衛氏（和敬翁）が購入した楂考書屋本（現在杏雨書屋所蔵）の中には黒川氏の蔵書印「本草」が散見されるが，前述の報告には当該分野はほとんど含まれておらず，その変遷や所蔵状況の詳細はあまり知られていない．黒川本「本草」には医書・本草・動植物に関わる広範な書物が含まれ，『古事類苑』を編む際の典拠とした可能性のある稀覯本をはじめとしてその所在を明確にする事は意義深いものと思われる．

【目的と方法】杏雨書屋における黒川文庫由来本を同定してその変遷経路，特に楂考書屋との関係について明らかにする．黒川本の手がかりは『杏雨書屋蔵書目録』（1982年）杏雨書屋内のデータベース検索，ならびに『楂考書屋図書目録』（1927年）を糸口とする．さらに原本を実見して，黒川氏の蔵書印から黒川本の同定，ならびに早川氏の蔵書票・書名票等から所有者の変遷を確認する．

【結果】杏雨書屋のデータベース検索から黒川氏の蔵書印有りの旨が記載される178点すべての原本を確認した結果，記載通りの蔵書印が認められなかった1点を除く177点が黒川文庫由来と同定でき，書名と管理番号ならびに『楂考書屋図書目録』の目録番号との対応を行った．管理番号に付される識別記号の内訳は「杏」152点，「乾」18点，「貴」7点であった．177点の内，126点については『杏雨書屋蔵書目録』や杏雨書屋のデータベースに「早川氏蔵書票アリ」等の記載があったが，51点には無かった．その内，早川氏蔵書票・書名票の痕跡の判定が困難だった3点を除く48点は蔵書票の残存や貼付の痕跡が実際に認められ，新たに楂考書屋由来と見なし得るものであった．『杏雨書屋目録』やデータベースで早川氏蔵書票の記載が無かった理由は，単純な見落としによるものだけでなく，剥がれて部分的にしか残っていないもの，中には意図的に剥がされた跡もある．特に「乾」（藤浪氏旧蔵）の識別記号に後者の傾向が見受けられた．「乾」の識別記号を持つ黒川本のほとんどは，『楂考書屋図書目録』に書名が存在しながらも，楂考書屋本を購入する際に選定を行った武田長兵衛商店社員，伊藤純一郎氏旧蔵の同目録への書入れによると，購入対象とされていなかった．従って和敬翁―伊藤氏の選定に漏れた早川本を後日藤浪氏が購入し，さらに藤浪氏経由で杏雨書屋に入ったために「乾」の識別記号が付けられたものと推定される．結論として杏雨書屋には少なくとも177点の黒川文庫本があり，数点の例外はあるもののそのほとんど（174点）は楂考書屋に由来する．尚，これらの中には「本草」以外の黒川本も若干含まれていた．

（本研究は2016年度杏雨書屋研究奨励の一部である）